

## 矜持のある人生

(ピリピ四・一〇～一三)

見よう見ようと思つて結局一回しか見られなかったのがNHK放映の「エアレース」時速三百キロ、最大十Gの圧力を受けながらギリギリの飛行をするパイロットたちの姿は格好よいことこの上ない。その中に日本人が一人いる。今シーズン二度表彰台に立った室谷義秀選手だ。そんな彼のインタビュー記事にこんなコメントが。「プロとは、他のことを捨ててまで、競技でトップを奪うための努力と準備を重ねる人でしょうね。」空のF1とも呼ばれるエアレースパイロットになれるのは世界でたったの一五人。その内のひとりなのだからここに来るまでにどれほどの努力をしたかは推して知るべし。メディアが付けたサムライパイロットの称号は伊達ではない。実に矜持ある人間である。

閑話休題。使徒パウロもまた矜持ある男であった。それはピリピ教会から献金を受け取った彼の態度に現れている。今日は彼の姿から真に矜持のある人生について二つのことを考えてみたい。

## 一、満ち足りていたパウロ

一〇節にはパウロの素直な心情が吐露されている。ピリピ教会はパウロのことを心にかけ、それを形にした。つまり献金をもつてパウロとその仲間達の生活と奉仕を支えたのである。だからパウロがそれを喜ぶのはある意味当然である。しかしそれはプライドのないへつらいと共になされる薄笑いのごときものでは決してなかった。それは続く一一節に「乏しいからこういうのではありません。私は、どんな境遇にあつても満ち足りることを学びました」によく表れている。ここで興味深いのは「満ち足りる」という言葉である。このことばは当時地中海世界に強い影響を与えていたストア哲学において多用されることばであり、「外的な状況に左右されずに満足を味わう、人間の内的自由」と定義されている。その上で次節においてパウロは自分が向き合っていた状況を詳細に語る。貧富、飽食と飢餓に代表されるようなあらゆる状況をパウロは体験し、その上でなお満ち足りた日々を送っていたというのだ。これは決してかっこつけても強がりでもない。実際「使徒の働き」などをみれば彼がローマ市民であり、リッチな家に生まれ育ったことは明らかだった。だがそうした状況から一転して貧困のどん底を経験しても彼の心は満ち足りていたのだ。

## 二、充足を与える神

ではいかなる状況にも対処できる満ち足りた思いはどこから来るのだろうか。件のストア派において「足るを知る」心とは後に転じて生まれた「ストイック」ということばが指す通り、節制と自己訓練の賜物であった。つまりは「自力」の「努力」の世界だ。しかしパウロ自身はこの境地に至ったのは自力などとは全く言っていない。それは「秘訣」ということばによく現されている。これは新約聖書中には一回しか出てこない珍しい言葉であり、一般の用例ではよく神秘主義の宗教において多用されるものだと言っている。神秘主義とは、要は偉大なるものとの邂逅である。努力以上に、出会いが先行するのだ。ではパウロにとって究極の「充足」を与える出会いとは何だったのだろうか。簡単である。それはあのダマスコ途上で出会った主イエスとの出会いである。それは圧倒的な体験であった。真昼の光（使徒二二・六）を越える圧倒的な光にさらされ、イエスに出会ったパウロは迫害者から宣教者へと百八十度の回心を経験したのだ。人生を変える力をキリストにあつて体験した使徒パウロはその時以降、この神に触れ学ぶ中で、主の力強さを体験したパウロはいかなる境遇の中でも主にあつて充足でき、何でもできるという確信を生涯かけて深

めたのである。あらゆる境遇を越えるパウロの充足感と積極的・肯定的な姿勢は自我の外にある「他力」の神に触れ、生かされて実現したのである。

\* \* \*

観光ガイドをしながら学費を稼ぎ、音楽に全てを捧げてきた彼。ギリギリの生活の中でコンクールに出場し、以後は賞金を稼いで成功をつかんだ。「百年に一人の逸材」「情熱的・強靱な声」「アジア最高のテノール歌手」と言われ、大きく花開こうとした時、突然の不幸が彼を襲う。声が出ないのだ。診断は甲状腺がん。歌だけを見つめ、それに全てを捧げてきた彼の人生が消えた一瞬だった。彼はもがき、呻吟し、祈った。そうして得た決断は声帯復元手術だった。この手術は局所麻酔で声を出しながら手術をし、その様子は恰もピアノやバイオリンの調律のようだという。その時彼が歌ったのは彼の音楽のルーツである讃美歌だった。彼は言う。「その時私は讃美歌を歌った。その日が人生の第二幕の始まりだった」と。それ以来生かされている喜びにあふれ、真心を込めて歌う姿によって多くの人を励ます彼、ベー・チエチオル氏はクリスチャンだ。友よ、矜持ある生はキリストの内にある。今、主を求めよう。